

# Café

カフェの話 1

1971年、街にはまだ闘争の名残りが残っていた。決して剥されまいとあちこちのブロック塀やコンクリートの電柱にべったりと貼り付けたおびただしい数のビラを、ガリガリと何かで引っ掻いて剥そうとした跡がある。そんな幾重ものビラの上にもまた、幾人もの若い活動家達の指名手配写真、リンチにより死亡したと思われる水膨れの水死体の写真が折り重なって貼りつけられていた。引っ掻き傷の隙間から見える水膨れの男は指名手配の容疑者でもあり、被害者でもある。

喧騒は市内の高校の中にも現われ、校舎や体育館のガラス窓もいつも誰かに割られ、割れたガラスにはなかばあきらめかげんに少々の目張りも施してある。校内には空虚な目をして額にしわを寄せ、長い髪を肩まで落とし、垢にまみれた黒い学生服を面倒くさそうに履おった学生達がウロウロしている。

そんな彼らが時折決まって顔をあわせる店があった。夕暮れ時、ガタガタ走る路面電車に乗り込み、四つ先の停車場で降りる。それは、開店の準備を始める安酒場や、うらぶれたキャバレーが並ぶ小さな町の片隅にある。そこはまるで廃屋のようなビルで、上の階はやはりキャバレーかピンクサロンか何かそんなものである。

そのビルの薄暗い階段を地下へ降りると店はあった。店の中に入ると、爆音のような音の衝撃と暗闇に立ち尽くす。まだ夕日の明るい時間、表から入って来た目には数秒間まるで何も見えないし、この怒涛のような音が一体何を意味しているのかも分からない。少しして目が闇に慣れて来ると少しづつぼんやりと見えてくる。耳も少し慣れ、音の意味を判別することができる。足元まで黒ずくめの女主人とカウンター越しに目が会った、彼女は黙って『空いてるよ』というように目でいつもの場所に促してみせる。

中は、外側にも増していっそう廃墟のようである。狭い店の天井は黒く高い。鉄骨の急な階段があり店の二分の一ぐらいが鉄骨で組まれた中二階になっている。その階下の部分は天井が低く、腰をかがめて入り込むとちょっと出る気がしないほどである。階段を上り、鉄製のベンチに腰掛け、鉄の手摺りに寄掛かる。いつもの湿っぽい冷たさ、赤いホーローのカップに薄いコーヒーが並々と注がれ運ばれてくるとようやく落ち着く。カウンターの隅に掛けられたレコードジャケットに目を遣る。煙草に煙った店の全部が見渡せるようになる。よく見るとあちこちの隅に見慣れた顔がある。皆それぞれ自分の場所にもぐり込んで音に埋ずもれている。地下室のコンクリートに直接土壁を塗った造りは、妙に安心するのだ。そのかび臭ささえ自分そのもののような気がしている。落書きだらけの土壁が、これ以上落書き出来ない程駄目になったら、店を閉めるという噂だった。

今のこの場のこの時は、長くは続かないという空気を、黒装束の女主人を始め、誰もが口には出さなくとも同時に感じていた。その奇妙な感触の連帯感が置ききれない気持ちを和らげてくれた。

夏場は天井から吊り下げられた黒いペンキで塗りつぶされた大型の冷房機が埃っぽい冷気を轟々と噴出して寒いくらいだったが、冬になると天井の高い部屋の真ん中に小さな石油ストーブがたった一つあるきりで、一日中部屋の中に居る女主人でさえ裾の長いコートを手放さなかった。若い十代が占める客達も外に居るのと同じ様にコートやマフラーで口元まで覆って座り込んでいた。

1973年秋、店は突然閉鎖された。それがどうい理由なのかは誰も知らない。それ以来、空虚な目をした学生達もいつの間にかどこかへ消えていなくなった。

カフェの話 第一回目は、私の遠い昔の思い出、生涯忘れられないロック・カフェ 'yagoi' のお話でした。



## COLUMN

鎌倉の猫事情 第三十四話

あの頃のゲーニーの姿は、多くの人の心に焼き付いていることと思います。毎日、毎日が辛く厳しい訓練の日々でした。確実に宿敵灰色猫の方が全ての点において、ゲーニーより有利であり、また勝つてもしました。その頃のゲーニーはまだまだお尻の青いほんの小僧っ子だったのです。

夜っぴて闘いを繰り返しているのか、朝日が昇って帰り着く頃には、まさに、言葉どおり、満身創痍。辛そうに座りこんで水をびちゃびちゃと舐める背中に手をやると手にはべったりと血糊が傷で埋め尽くされています。驚いてよくよく見ると、薄汚れた茶色の毛の下は、いくつもの深手と小さな傷で埋め尽くされています。お店のスタッフたちも驚いて、「どうして、こんなになるまで・・・」と、傷の手当てでもしてやろうとしますが、受けつけません。そしてひとしきり水を飲み、少しの腹ごしらえをすると、額に皺を寄せ、思い切ったように、ふらりと立ち上がり、出かけていくのです。塀の向こうには、夜と言わず、昼と言わず、灰色猫が待ち構えています。ゲーニーが塀を越えたとなん、二匹の叫び声と、つかみ合いながら駆け抜ける音が聞こえてきます。私達は顔を見合わせ、思わず耳を塞がずにはいられないほどでした。またある時は、片手を何倍にも腫れあがらせて帰ってきました。手をつけず、まっすぐに歩けないほどです。その日もやはり、安心できる少しの休息をとると、片手を引きずりながら出かけて行きました。ゲーニーの頭の中はもう闘いのことしかないのです。目に映るのも憎い灰色猫の姿だけだったでしょう。いくらそんな闘いを繰り返そうとゲーニーの劣勢が変わるわけではありません。皆でいくら説得しても、止めても無駄でした。

灰色猫は完全に優位に立ちました。そしてとうとう彼はミルクホールの塀を越えたのです。あるうことか、勝ち誇った顔で、我敷地内の階段や物干し場などへゆうゆうと現われるようになったのです。もちろんこれは私達も黙ってはいません。人間達の追い散らす声さえ嘲笑するかの様に、灰色猫は去って行くのです。しかも、どうやら灰色猫の最終目的はゲーニー君の愛妻であるスイーピーちゃんのようなのです。

力しか通用しない猫の世界、ゲーニー絶体絶命のピンチです。

to be continued

お詫び 都合によりミルクホールタイムスは2ヶ月間休刊し、ご迷惑お掛けしました。次の発行は、5月25日頃の予定です。